

新編能楽文集

上

中村俊定文庫

文庫 18

810

1

60 1 2 3 4 5 6 7 8 9 70 1 2 3 4 5 6 7 8 9 80 1 2 3 4 5

福をよみて是を山信少陸所吟不継き
らるる諸家の所文を探りて其編
久手集のありものな書に三人の所を美
ふら書けしと書世子御世の諸を
としし目したる中の中行し様
充り近年御世の業の盛りの所は
あふらるる御世の業の盛りの所は
茅の森筆力の御新とかわり
其人のより御世の業の盛りの所は

お見えなするるを御世の業の盛りの所は
あつたを四本おまへし
御世の業の盛りの所は
御世の業の盛りの所は

あつたを四本おまへし
御世の業の盛りの所は

新編俳諧文集上

蕪菴蟹守著

凡例

一 大和文章伐々れ多ありおぼゆる中ハ俳諧の
一 格と貞徳翁の宮られしと李蕪翁も亦一家
の風を身し門人ハ二三部の撰ありとそれ中
みも風俗文選も門ともよく人の識るところあり
俳諧乃備集せりみたりといへともをむらむを
俳諧文集と号書とを正未確て著すもの故し
おのれ嚮年おもひまらるるりて西ふむらむ
接歴のりく法家ふと未て數章を志す

上凡例

一

是を女門に全郊不編をさんめらたら
さふり書をふさふへいふてわれと
ちく蠹乃巢とあり果人もほいあされと又
類不増補して文選よりこゝろを古人を緝
録し當時の作者をも書載をれをやうなく
一編のやうにあはれりちふ季

- 一此編古今の人を霄塊して卯年曆の次牙を
ころんとくとも文章の體裁分類をあうは
る諸神ひらくふゆ。おあうゆ急あま
- 一世度別不発句撰上本の折う敢て一雙ある
ものあもあうまといへ編も亦控ある

とて例の書房の心ひらき
ねて五月あ川の流き流きいさもあふ
さや強ぬ流きの一さあはさう末をさうの
わのさう僅子硯の海ふ入られ波あせを
ふ乃行とらさかともわらんか

新編俳諧文集上

目錄

駒墳集序 京
 高館懷古 江戸
 桃李集序 京
 丹布系比鳥序 カヒ
 虎画讚 京
 新小菟序 江戸
 何帛集序 江戸
 蘭更 京
 蓼太 江戸
 燕村 京
 葛里 カヒ
 重厚 京
 巢北 江戸
 成美 江戸
 姨捨山賦
 二十歌仙序
 芭蕉翁真跡序
 其唐松後序
 茶摺小木序
 十時庵再勸進帖序
 無名鳥題言
 樗良 イセ
 曉臺 スリ
 士朗 スリ
 敲水 カヒ
 乙二 カヒ
 道彦 江戸
 葛里 カヒ

新編俳諧文集下

目錄

端津久李 京
 瓢藏銘 京
 犬坊主傳 三ノ
 送友人西遊序 カヒ
 蟬辭 セツ
 息杖辨 江戸
 毛蓼說 アキ
 二十歌仙序 カヒ
 月居 京
 雪雄 京
 卓池 三ノ
 蟹守 カヒ
 桐栖 セツ
 豪山 江戸
 路宅 アキ
 采紀 カヒ
 炭說
 茶隱書画帖序
 芙蓉扇賦
 其夕女句帖序
 豆太鼓頌
 紀行
 名月辭
 書画帖跋
 椿堂 イセ
 篤老 スリ
 瀾古 スリ
 玄蛙 アキ
 寥松 江戸
 鳳郎 アキ
 圭雨 アキ
 魯隱 アキ

下凡例

三

俳諧古今説	井里 <small>イセ</small>	雜文	泥中 <small>カヒ</small>
秋月序詞	鶯笠 <small>江戸</small>	楨小庭記	寥松
雨中孤詞	氷糸 <small>江戸</small>	紀行	蟹守
夕顔頌	少翁 <small>カヒ</small>	蟬説	一飛 <small>カヒ</small>
朝起論	真貫 <small>カヒ</small>	國見平記	真洞 <small>カヒ</small>
送鷹園主東遊序	静管 <small>カヒ</small>	小築記	對山 <small>江戸</small>
自誠	護物 <small>江戸</small>	折筭銘	寥松
住吉御田記	鶯笠		
憎鳥辭	蟹守		

新編俳諧文集上

菴庵蟹守著

駒墳集序

蘭更

世のかみとせ銭の翁甲斐々根み杖をわたりし多き
 矣此氷とけそめしより春も日あまなり月ふらり
 つり約の妻ふたもあゝあゝの同乃やとりこゝろ
 旅の哀ぬくく暫時百景の旁方ぬハ古人ももた
 腸をそとこ山里の多れ仮の宿は鬼の皮は松
 つれと童子もも慰め給ひあるよ〜風流さ海〜
 ある中子馬蹄多玉のよりととるあさめ〜もあ〜
 されハかの言孫を得ふと〜欠子載不汚の正風を

上

一

あふき遠近の好士の匂くをりて馳墳集を
選んりやをきく三車主人の執事をぬくみりて
老懶おもむく時をむくき十う一をむに嗜抹を家の

姨捨山賦

樗良

更科の月めくくある秋八月八日の叔姨捨山小堂ま
鏡臺山を冠りまけのむくふなたり筑摩川花やうに
簾をめぐり雲井のそくを名のくく水上の月とやうに
田毎の糸おきとひく山の松風ふくくわくり宝う池
桂う池文科川まく流稲荷山八幡の里川中流を
ふきおきと居ふ見えかくは吹風精神をせめき

あ~~~~見るもの目めうこくをそれあり粥をきくと音を
煙くきく~~~~石上めんをきき

高館懐古

葵太

最後の戎衣一ふおき海り平泉のきんあるをるに
大御小車の行あてぬるあるた右の家くを軒むりひ
ち~~~~ららきりきい~~~~機のをくくふあつまれ流
人も顔あ~~~~しうさうてみいりち行らんもきくはたけき
ものくふる金鞍みまきりたをやうある女房ハ銀簪を
かきた系あゆる柳の池所をみくり小琴の音を
たやきた風う海流伽羅乃池所あを袖をむくく

上

二

裳をかゝり四方如風色を以て、衣の愛ハ女と
多に事々々々ものをもと和名或詠り離情をつくし
衣川ハたゞのまてこそ波をうらみれと源の重之
涙とそくそく流こるも結さし月の山ハありれり
湧白山を雲れわけほのをたゞみ國見山室根山た
志福山を花の雲みそひえいおせのまじりハ時をたひ
せ鳴ありいよおの軍をた立志くみ金鷄山ハ曉を
報して時々のほみそ和まるり似たりも毛越寺
の堂塔四十余様房五百余宇中尊寺金色堂經
堂吉祥堂ありしり社佛圓山く日小映一月小
かやくふんつくむもの柵を義士和泉三郎の紫小

しと碧流岸をうらみ上川小流て言報ふりあり
源廷尉千かいつきたる屋敷くく衆早れ水原を
遠るくくみまかいつまて秀衡一門の榮
耀更ふりありもわく口をあまんそめを鳳を裂
麟をほめる目をよろこぶむるや炎を乃梅花
去冬のさくもまてこのとさたおられしとよを厚
鶴と九阜路ちりりも子秋を楓葉ハ十符の浦小
万代をこくきしもたし今きり

山そひえ川ありれりあ第の風

二十歌仙序

曉臺

吳道玄龍を画て鱗甲うきき忽烟霧起て雨を
くくは烟霧龍を生ずは龍烟霧をむくはをた玄
何そ龍を画ん龍も又其人を好てあるもの一龍
奇をあしひより妙をあげたると妙あり其龍其
のほろうぬを玄龍といふ桃青二十哥仙ハ画龍あり
画龍ありそのうち玄龍あり冬の日五哥仙られたり
世上今画龍を身きく何きの家あり玄龍とを
究む

桃李集序

菴村

以の能わしめあり吾輩人四時曰まきしれ玄仙秋をうせぬ
友冬とのそりぬき人信てあふあんとつふき人判て
曰世哥仙ありそやう年月を種くおそくは流り
おくれえん手筈て曰俳諧の活達あるや実ふ流り
有る流りおしは一人ハ一圓郭ふ流りて人を追ふて
走るうともし先ん出るもの物て後れたるもの追ふ
平似たり流りの先後何と成てまうのへらんや只日
くおあのれ胸懐をうしおてらるるあめのおん
あして翌日又おあれ俳諧あり題しそをく
上

甲

虎畫讚

重厚

虎ハ五百歳に齡ありて山獸の長なる由也かりも
武士に箭先をおそはるるも其掌大なるし
されとなましく狗子を喰ふともさう忽碎るあれ外
をもて狗子に盧の酒とさゆめを彼の野に
馬碎木のあある事似され必しも世に
こゝろ落ちて終ふ地獄の底なり夢のこされ赤
鬼の情鼻をさうさうくくはるりめをさう満
〜む

茶摺小木集序

乙二

そも夏はゆる〜さものらわし 東風我晴窗
夢裁て吹落せ江湖白鳥の色とつらし 碎仙も
天曆の帝の滋野内侍うさふき人や行く人と
名句も枯理をうけゆる翁のあはれも花も死人越
人々勢も池塘喜草小惠連と思ひせし 名詩も
呂翁の囊中の枕とつらて黄梁を炊く写小榮進と見
〜も担里紀五十夢の〜らぬ珠と鼓平撫ふも
も世縁紫のわけはの園鶏野の雲も夏なりあつ〜
さうものらわし〜夏子校相小源田の浮橋をうけ〜

いふふと成つくりぬ高地の面自平傳へ侍りたりとて
東都旅宿乃什物み跡一傳ふより一それらそれを
家のを尋りありしもの程をついでし續小菟踏く
小菟いやくうわつし子根念をあをを敷ふりし
侍りしよきとらうくはしりてを頼取に志ししむ
しりもあゆり事ん被室丹不靴を拍とて以て侍
八五愛ふおしりいもを侍りんよりも浄名居士の
方丈不疲たりし一あらしこのいひの楚めを新し
むしりしかき付侍りしありしもあしりしれ梅のたて
柳のぬきしとめしりをり出あしりしりしき楚とも
何むしりともあつけ侍りあんは冠者りしりしき

たふへき糸撰者を郎地念あくやうとあつて江戸
根えの因縁りやうせしせき屋の築北濱舌

十時庵再建勸進帖序

道彦

羽根くつもみ及とてあゆさうふ美の栖家をか
きとびる狸の糞泥をあふしりてあももをのし
かきも猿の猥掛ももりあつてあつた外お皆
其性あつものゝの馴てあつし一長あつたり
そのり入し山の邸てしてしとてあつてあつて
幻燈老人の程をたのしむりあつてあつてあつて
さてあつて天狗達うお撲とり場不定めしし小梅の

上

九

書るおもひけりてあつも紙物の文字をもちひあつ
例のふらふみみ落さる焼曲あるく一あれ平
それそりの能者のこころもをつみ入まされ清濁
彰長のとりこみぬくも嵐雲のそのくちあつも
たこの中ふおもひこるこころいままじいまはわ
さうりものれと囊を括る平とくあしとくや
さうかきぬまこころいさうくはしをさう
唇をつらみゆる

無名鳥集題言

葛里

春の日のあけ木の音をこころり秋の目の葉紫れあ
にやとる其美景みむくそ第代もあまら
うらふあつう天権ありさうねさくとをのせ
自達すられ好ひのむとあり不さ山あ
ものさわじしきあけけきそりのそらあひすて人
のあきもていひそらけへきものくまき秋を交なり
夏の目れ照りさうくおもそれ秋の降あはるあも
只妙山をえられ世の中は困苦をもさされ服た
しき事もあるてあん那さみあふさきあそひの
あつあり東坡居士乃衣拵あれを五十とせ
いさうて百年の樂あみわりさうてきとのさされある

上

十二

とそ中しと推の本あるとあるをきかめしとさ唐の
うらふ思ふとちまきとるし多蓬ふもあく推ひたるん
ち実ふ玉の弦もゆゑゝゝゝふらん是れわさひ乃
三あり鶴の足長し鴨のあし短しよしや
あの名形し人の心は名形しし多ふあしと
只と心とい無何有の交ふあふよ

二好

下

